

雪  
の  
日  
と  
水  
曜  
日

眞瀉郁ヲ  
*Magata Ikuo*



◆ 目次

雪の日と水曜日……………	5
リバーシブルな腸……………	75



雪の日と水曜日

リバーシブルな洋服を作るとき、二枚の洋服を縫い合わせる。

ただし最後に表にかえすことのできる小さな穴を目立たない所に残して。

そこは表に返してから手縫いでふさぐ。

その場所は多分脇か裾だろう。

しかし何枚かの洋服で穴をふさがず縫い付ければ、その数だけリバーシブルな服ができる。

(それは果たしてリバーシブルと言えるかどうか分らないが)

私が開けてきた人生のホールに、これから開きたいホールも含めて、何個かのリバーシブルな世界を作る。

それを行き来できる、肉体の繕わないでおくべき穴は腸と膣だ。

腸は地球の堅い地殻とその下のマントルのようだ。

そこを過去と現在をつなぐ列車が走る。

終着駅に、普通、急行、特急列車が到着する。

出発した列車の数より到着列車の数が多いとき、それはリバーシブルなある世界の腸から出発した列車が紛れ込んでいるのだろう。

そして膣は女性のみ可能な未来の宇宙への出口である。

もし子宮に記憶にない生命が宿ったとき、それは未来からのコンタクトだ。

（「風と光のリメイク」第三章リバーシブルな腸より）

その年、二〇一×年八月の日曜の朝も、今までと同様地球のある居場所のその時を刻むことに、何の疑惑もなく全ての出演者が演じている。

この国の夏がますます暑くなることもシナリオ通りだったのか分からないが、数年後に開催される世界的祭典のためには、それがどんな原因に起因しようとも、この都市の気温を下げるための解決方法を探ることは最重要課題の一つだ。

「いかにトイレを綺麗に保つか」という課題を持つ平凡なある家庭を取り上げてみても、その日曜日の朝はやはりいつものように過ぎていく。

「ああちよつと、大きい方なら、一時間は下のトイレは使わないでね。今掃除したばかりだから。上はいいけど早めにしてね、掃除これからだから。」

「……臭いと暫く待たないといけないし」

新聞を読んでいた夫貴美彦がそれを閉じソファから立ち上がるのを察知すると、やよいは慌てて警告した。

声は穏やかに装ってはいるものの、その目は有無を言わせない。

その手にはこれから始まる一階の掃除のための、三つの種類の違うハンディーモップが握られ



ている。

「……トイレ位自由に使わせてよ、自然現象なんだからさあ」

「今までずっと、私一人でトイレ掃除してきましたんです。

家族全員の汚れを毎日綺麗にしているんです。

掃除したばかりに汚されることになったら……気持ち分かるでしょう？」

貴美彦は（汚さないよ）と言いたい言葉を飲み込み、二階のトイレへと上がって行った。

ああまた始まったと碧は思った。

綺麗好きの母やよいはこの家のメンテナンスに必要な以上にエネルギーを注ぎ、家族にその使い方をご細かに注意する。

この家は既に二軒目の注文住宅であり、そのほとんどをやよいが設計した。勿論それは素人的な大まかな図面に置いてではあるが。

二度目とあって、やよいは数々のこだわりを予算内が許す限り取り入れた。

当初、風呂とトイレの間に坪庭を作り、どちらからも眺められる憩いの空間を作ったかった。しい。

それを実現させるには狭すぎる尺と、西側で植物が育つには日当たりが足りないその空間は結局坪庭を諦めざるを得ず、その尺はトイレに加えられ、おかげで妙に幅の広いトイレができあがった。

そこには焼杉の腰板が回され、壁や備え付けの手洗いシンクのカウウンターに絵や植物が所狭しと飾られ、あたかも何かの意志を持った部屋だ。

壊れた鳩時計が掛けられ、振り子の代わりにフェイクの蔦と葡萄が垂れ下がっている。

それはこの部屋では時が止まっていることを強調し、「ごゆっくり」とでも言っているのか。

やよいがことごとく家に執着する一日に碧はほとんど諦めかけてきたが、退職して三か月程過ぎた貴美彦には、顔を突合せている時間が急に延びたせいか、まだ生活パターンの構築が落ち着いていない。

そしてこんな一触即発になりかねない暗雲が漂うことになる。

その暗雲が嵐にならないのは、貴美彦が長年の連れ添いを経て気の強い妻やよいを良く言えば理解、しかし実状は何を言っても無駄だと諦めているからだ。

それが家族の協調性を育み、何事も問題ない歴史を刻んで、平和な家庭を維持する一つのコツとも言える。

それでも、この間はトイレの制約に関してさすがにやり過ぎだろうと思える出来事があった。

【トイレ漂白中につき午前中使用禁止】

の張り紙が張られていた。